

# 受保連NEWS 創刊号

受療者医療保険学術連合会広報誌

2013年9月14日創刊

## 受療者医療保険学術連合会、発足から一年

受療者医療保険学術連合会（受保連）は、2012年9月1日の発足より一年を迎えました。このたび、広報誌の創刊にあたり、受保連の設立の背景やねらい、この一年の活動を振り返ります。

### 設立の背景

高齢社会の急速な進展や医療技術の高度化、国民の保健医療ニーズの多様化など、医療を取り巻く環境が厳しさを増すなか、現在の医療制度は、様々な歪みや問題を孕んでいると言われています。医療費伸展の陰には、医療の受益と負担の不均衡などが生じており、また、必要な医療資源が適正に配分されていないことも考えられます。このような背景を踏まえ、国民が安心して安全な医療を適正に受給できるよう、国民（受療者、医療者も含む）が日本の医療の現状について問題意識を共有し、共に学び、意見を出し合い、議論を重ね、あるべき医療保険制度の実現に向けて協働する必要があると考えます。

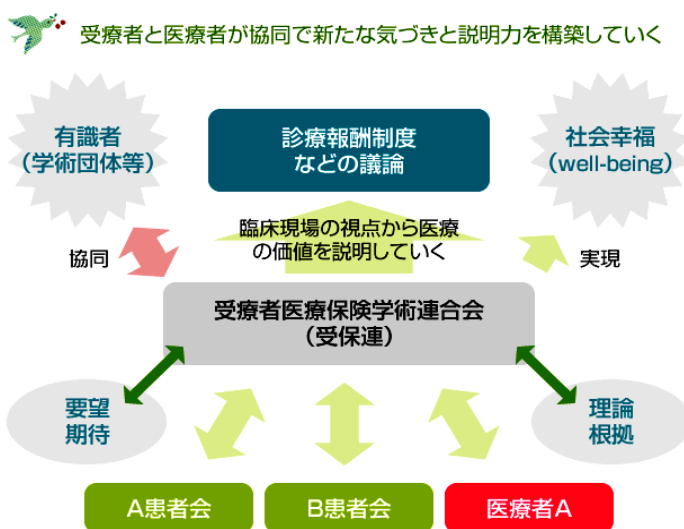
### 受保連のねらい

受保連は、受療者と医療者が共に、医療の価値を考えて意見を出し合う場として、また、医療の価値を発信する説明力を提供する場として機能することを目指しています。その結果として、国民皆保険制度を持続させ、広く国民の健康及び福祉の増進に寄与していきたいと考えております。その実現のため、以下の3本柱を基軸として活動しています。

- 受療者の医療に対する思いを表出し、医療の価値の定量化を推進する
- 保険収載や各種基準について考え、受療者目線の医療提供・受給環境の整備を検討する
- 上記について合意形成を図るため、学術的に議論を交わし、医療の価値を説明する

### 活動について

具体的な活動としては、以下のようなものが挙げられます。まずは、受療者や医療者自身が、現在の医療保険制度や医療経済について理解を深めるための勉強会を開催します。また、日本の医療の在り方に対する認識を受療者と医療者が共有するため、積極的に会合を開き、意見交換をします。そして、個々の医療の価値について学術的に評価するための研究や、受療者や国民全体の医療の「受益と負担」に関する研究を行います。それらの成果を社会に発信する取り組みを行います。



Copyright © 2012 SAPP All Rights Reserved.

受保連設立時のコンセプトイメージ（本会HP掲載図の再掲）

## 会員について

受保連設立時は、がん、心臓、腎臓、アレルギー、呼吸器、神経、眼疾患などの受療者に加え、各領域から30名程の医療者が参加によりスタートしました。現在、徐々に会員数は増えており、個人会員が増えてきております。今後は、さらに受療者の新規加入および参加を促していきたいと考えております。

## 活動報告

### 設立総会&シンポジウムの開催

2012年9月1日、東京（コンファレンススクエアエムプラス）にて、受保連設立総会およびシンポジウムを開催しました。総会は会員のみが参加し、シンポジウムは一般にも公開され、受療者、受療者系組織代表者、医療者、マスコミ関係者など、多くの方にご参加いただきました。

「受療者と医療者の協同による医療価値の見える化」というテーマのもと、川島康生氏（受保連会長、国立循環器病研究センター名誉総長）の開会挨拶に続き、5名のシンポジストをお迎えしました。

- 「社会経済的価値を共有する意義」、田倉智之氏（受保連副会長、大阪大学大学院医学系研究科 教授）
- 「患者目線の医療保険」、宮本高宏氏（受保連副会長、全国腎臓病協議会会長）
- 「臨床医の立場による医療経済」、黒岩義之氏（受保連副会長、前全国医学部病院長会議会長）
- 「医療保険制度の概要」、迫井正深氏（厚生労働省企画官）
- 「社会保障と財政」、八幡道典氏（前財務省厚労担当主査）

シンポジストによる情報提供の後、遠藤久夫氏（学習院大学教授）を座長に迎え、黒岩氏、迫井氏、田倉氏、八幡氏、天野慎介氏（受保連領域委員会委員、グループネクサス理事長）、遠山和子氏（受保連会計委員会委員長、日本呼吸器障害者情報センター代表）にご登壇いただき、総合討議を行いました。会場の参加者からも積極的な質疑があり、登壇者に加え、参加者を交えた意見交換がなされました。

最後に、小柳仁氏（受保連副会長、東京女子医科大学名誉教授）より閉会挨拶をいただき、設立シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じました。



2012年9月1日、設立総会にて

## 受保連第一回セミナーの開催

2013年7月19日、東京（ベルサール八重洲）にて、受保連第一回セミナーを開催しました。田倉智之氏を講師に迎え、「医療技術の経済評価（医療の価値の見える化とは）」について情報提供いただきました。医療を取り巻く社会経済の動向を踏まえた本質的な課題の明示に続き、医療分野の価値を評価する概念について事例を交えながら整理していただきました。また、こうした医療経済的評価の結果を基に、我々が医療の価値について適正に論じていく際の留意点等をご教示いただきました。最後は、会場の参加者との活発かつ率直な意見交換がなされ、勉強会を今後も開催してほしいなどの要望も意見として出されました。

## 委員会活動報告

受保連には、5つの委員会が設置されています。過去1年間における各委員会の活動および今後の予定を報告いたします。

### ＜会計委員会＞

受保連の口座を開設し、会費徴収を開始しました。  
今後、会員番号の周知について検討します。

### ＜総務委員会＞

会合を2回開催し、総務委員会の体制整備などについて検討を重ねてきました。今後、各種イベント運営の準備を実施していく予定です。

### ＜広報委員会＞

計4回の委員会を開催し、広報誌およびパンフレットの作成、今後の広報活動の方向性について検討を重ねてきました。広報誌の創刊に加え、パンフレットやホームページ等に掲載していくロゴマークを作成しました。

### ＜学術委員会＞

計3回の委員会を開催し、医療経済に関する調査について、他学会との連携の可能性について意見交換をしました。今後、領域委員会が展開する各種調査の倫理的側面について審議する仕組みを検討します。

### ＜領域委員会＞

在宅医療WGおよび循環器WGでは、受療者（ご家族を含む）や医療者などを対象とした医療経済に関する質問紙調査を計画し、実施しました。今後、調査結果を公表する予定であります。

## 今後の活動について

受保連では、今後も受療者と医療者が協同して、様々な活動に取り組んでまいります。総会、シンポジウム、セミナーなど各種イベントの開催にあたっては、ホームページやメーリングリスト、郵送等にてご案内いたします。また、学術委員会および領域委員会を中心に、今後本格的に行われる各種調査研究の成果につきましては、当ホームページのほか、報告書や論文、プレスリリース等を通じて、随時ご報告いたします。

## 受保連の委員会

### ■ 会計委員会の役割

会費徴収や出納・保管・収支管理、各種契約手続き等、受保連の会計処理を行う

### ■ 総務委員会の役割

会員情報の管理、会議や各種イベントの運営、文書管理等、受保連における事務処理全般を行う

### ■ 広報委員会の役割

広報誌など対外的な情報発信全般、ホームページ管理、取材対応、各種デザイン作成等、受保連における広報活動を担当する

### ■ 学術委員会の役割

受保連全体に関わる課題について、研究・調査を実施し、報告書を作成する等、受保連の学際的活動を担う

### ■ 領域委員会の役割

領域特有の課題を検討する場として9つのワーキンググループ（WG）を設置し、個別課題の調査実施や報告書作成等にあたる

【現在設置されている9WG】

- ・がん系
- ・循環器系
- ・呼吸器系
- ・消化器系
- ・腎臓尿路系
- ・神経筋骨格系
- ・感覚器系
- ・アレルギー系
- ・在宅医療系
- ・その他系





## 会員コラム

# 患者と医師 — 50年の軌跡

小柳 仁

受療者とは医療をうける側にいる人を指す。私は医師であり、今も医療者として毎日を過ごす、時として受療者となることもある。いま健康な人も含め、全ての人が将来は受療者となる。この意味で私たちはこの会に「受療者」という言葉を用いることを決めたわけであり、受療者と医療者が相対する言葉であることは毛頭考えていない。二者ではないのである。

50年前、私は新人の若い医師であり、身も心も健康であったと思う。北大工学部出身の土木技師であった父が戦死し、母子家庭であった。母は貧しくとも勉強はさせてくれた。故郷の北国の医学校をやっと卒業し、当時心臓血管外科の日本のメッカであった東京女子医大の榊原仟教授の門下生となった。当時開心術は殆んど救命できない時代だった。毎日複数の死亡例があった。死亡診断書を書き、悲しんでいるご家族に病理解剖をおねがいし、終了したら霊安室に安置してお参りし、家族の肩を抱き、こどもがいたらその頭をなで出棺を見送った。若かったので泣きながら下宿に帰った。(女子医大の病理解剖の標本室には世界屈指の数の貴重な資料がある。)

こうして患者さんに育てられた新人医師は、40年間の大学生活のうち21年間を教授職として働き、7000例の自験手術を含め13000例の手術を統括し、3000の科学論文を書き、14名の外科教授が教室から巣立った。多くの国際学会、日本と名のつく学会も多数主催した。その間、心臓の手術の死亡率は1%台となった。

しかし今、仕事をやり切った透明な心境で、そんなことは何の誇りでもない。たった一つの誇り、それ

は生涯に一度でも病理解剖を患者さんのご家族に断られたことはない。危険な手術であった時代も含め、訴えられたこともない。順調に経過した患者さんのことは忘れ、内科の先生にお返しするが、亡くなった方のことは忘れないことが多い。人の死には残った者を成長させる力がある。少なくとも私は亡くなった忘れ得ぬ患者さんたちによって育てられた医師であると思っているし、受療者医療保険学術連合会の発足には、そうした私の想いもこめられている。



小柳仁(こやなぎ・ひとし)

昭和11年、新潟県生まれ。

新潟大医学部卒。

東京女子医科大教授を経て同大名誉教授。

日本胸部外科学会名誉会長、

米胸部外科学会正会員、

臓器移植関連学会協議会代表世話人。

受療者医療保険学術連合会(受保連)副会長。

著書は「心臓にいい話」(新潮社)ほか多数。

伊賀塾 塾長として後進の育成に心血を注ぐ。

## <問い合わせ先>

### 受療者医療保険学術連合会(受保連)

Japan Socioeconomics Association of Patient and Physician

( SAPP )

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-2

大阪大学大学院医学系研究科

医療経済産業政策学内事務局

TEL : 06-6879-3401

Email : sapp0901@gmail.com

ホームページ : <http://www.sapph.jp>